

二〇二一年度 第二回

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから31ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

机を整理していたら、ゼムクリップの中に埋うまったネジを見つけた。三センチほどの長さの、一見①何の変哲へんてつもないネジだ。

「なんだ、ここにあつたのか」

つまみあげる。利那せつな、あの夏の一コマが胸に浮うかんだ。一九八七年の八月の終わり。金沢かなざわにある実家でのことである。

「それにしてもお前が銀行ねえ。ふーん」

そのとき、台所に立って夕飯の②シタクをしながら、母は A ③自分の息子が銀行へ行くことが信じられないのか、何度もそう繰り返く返かえしていた。ビーフシチューの匂においが漂たよっている。夕焼けがリビングに斜なめに差さし込み、まだ強い日差しが庭先の夏椿なつばきの实を照りつけていた。

二十日の夜に始まった就職戦線は、内定の後一週間ほどの拘束期間こうすやくを経て、ようやく昨日になって自由行動となった。それでこの日、半沢はんざわは遅おそめの帰省をしたのである。

「ほんとうに勤まるのかしらねえ」

母はシチューの加減を見ながらまたそんなことをいい、サラダにする野菜を冷蔵庫から出す。父の帰宅を知らせるチャイムが鳴ったのは、そんなときだった。

リビングに入ってきた父は、「よっ」と一言。いつものことながらそっけなく、 B ④昨日も一昨日も、一緒に暮よらしているような気安さでいうと、カバンから紙箱を出して中に入っているものをテーブルの上にあけた。

「なんだ、それ」

転がり出てきたものを見て興味を持った半沢は、父と一緒にのぞなって覗こき込む。

「ネジだ」

父がいった。

「それは見ればわかる。何のネジだよ」

「何のといわれても、まあ、いろいろ。フツートのネジに見えるだろ。ちょっと手にとってみろ」

言われて、テーブルの上に転がっている十数個のネジから一つをつまみ上げる。

C

違和感にとらわれ、半沢は父を見た。「軽い」。鉄製だと思ったネジは、意外にも樹脂製のだった。

「だろ。それだけじゃないぞ。このネジはな、樹脂としては今までにない強度を持つてるんだ。鉄製のネジと比べると重さは五分の一。なのに強度はほとんど変わらない」

ポリアミド系樹脂をガラス繊維で強化した複合剤で云々という、専門外の半沢がきいても、^②右から左へ抜ける説明を加えた父は、
どうだ、といわんばかりに胸を張った。

「要するに、これを使えば製品が軽量化でき、ついでに腐食も**b**フセグことができるということか」

「まあ、そんなところだ。ついでにいうと、軽いから運送コストも安くつく」

「故に半沢樹脂工業の戦略商品ってわけだ」

父は得意げに鼻を鳴らし、「銀行なんかやめて我が社を手伝わないか」といった。

「やっと就職活動が終わったばかりだったのに、また勧誘かよ」

「またって、お前を勧誘するような会社があるのか」

半沢はおどけて顔をしかめてみせる。そのとき台所から、「父さんは、あなたに三共電機さんに行つて欲しいと思つたのよ」と母の声がした。

三共電機は、樹脂成形を主な業務にしている父の会社では一番の得意先だ。心の痛点を突かれた。得意先の三共電機で修業をして、

ゆくゆくは父の経営する会社を継いでもらいたいというのが父の本音だと知っていたからだ。

だが父は、「そんなことないよ。」^③ オレは、そんなケチなこと思っていないね」と否定した。

「ほんとかしら」

疑わしげな母に、「ああ、ほんとだとも」と、父はやけに真剣な顔でソファに体を投げかける。

「これから国内のモノ作りは苦しくなるからな。うちだって、いつまでもつかわかつたもんじゃやない。そんな会社を息子に継がせるわけにはいかん。和樹にだって継がせるつもりはないね」

和樹というのは、地元の国立大学に通っている半沢の弟だ。

「ほう。そんなに弱気だとは思わなかった」

「弱気とかじゃない。冷静な観察に基づいた意見と欲して欲しいね」

父はネクタイを外し、ワイシャツのボタンを緩めると両手を腹の上で組んだ。暑い夕方だったが、父の方針で、当時の半沢家ではクーラーをつけていなかった。クーラーそのものはなかったわけではないが、普段の生活で冷房を入れるという習慣がなかったのだ。

「なんとなく景気はいいみたいだけど、こと中小零細のモノ作りということに關していうと、もう衰退する兆しが見え始めてる。

三共電機のひとつに聞いた話なんだが、いまに大企業は、国内の下請けに任せていた部品の製造や加工を、コストの安いアジアの国々へもっていくようになるっていうんだ。そうすれば、人件費だって日本の何十分の一で済む。そんなことにでもなってみろ。いまあ

る我々中小下請け企業の仕事なんかあつという間になくなつちまう」

「そうならなきやいいね」

^④ 少し淋しそうな父の表情を見ながら、半沢はいった。「母さん、ビール」と父がいつて、缶ビールが二本出てきた。コップはなしだ。父はその一本のプルトップを^⑤ ムゾウサに引いた。

「コストってのは恐ろしいぞ、直樹。会社の懐をどんどん狭くして、今までの取引がどうか、人間関係がどうなんてことは全て

水に流す勢いだ。これからの中小零細企業れいざい きぎょうってのは、^dモンドウ無用のコスト競争になつてくる。かなりの数の会社が淘汰とうたされるだろうな。それでなくても、業績は相当悪化してくるはずだ。このことはお前にも関係がある」

半沢は黙だまって、父を見つめた。半沢の返事を期待しているわけではないことは、その顔を見ればわかった。

「中小零細企業が傷いたんでくるってことは、要するにそこにカネを貸してる銀行もまた痛みを被こうむるってことさ。ただ、お前ら銀行はお上の保護ほごってやつがあるから、それで潰つぶれるかどうかは別だけどな。だけでもしかししたら、潰れる銀行が出てくるかもしれんぞ」

半沢は笑った。父の心配性しんぱいせいは昔むかしからだだが、銀行が潰れるだなんて真顔で言われたら、これはもう、笑うしかなかった。産業中央銀行で内定をもらった夜にも、先輩せんぱいに連れられて食事に向かうタクシーの中で「これで君は一生安泰あんたいだ」と太鼓判たいこばんを押おされたばかりだ。銀行に就職するということは、自分だけではなくその家族まで、一生を安泰のうちに暮らせる保証を得たのと、^eドウギだと、その先輩は説いたのである。

「銀行が潰れたらすごいことになるだろうね」

父に話を合わせるために、⁵半沢は心にもないことを口にしてみる。

「まあ、そうなってみれば、お前もわかるだろう」

父は、テーブルの上のネジをひとつ、半沢に放り投げた。慌あわてて受け止め、もう一度見た目から想像できる重さと、指先からじかに伝わる重さとの微妙びみょうな違いちがいを感じた。素材が単純なプラスチックとは違うのだろうが、ひんやりとした、鉄に一脈通こずる硬質こうじつ感を有する不思議な物体に思えた。

「そのネジを開発するために、五年かかった」

「へえ」半沢はまじまじとその不可思議な感触かんじよくを指に伝えるネジを見つめる。

「発想を得たのはお前が大学に入る前。そういうネジができないかなと思って、まず始めたのは材料探たんしだった。試作に試作を重ねて、専用の機械まで自作してようやく出来上がった。お前にとっては何の変哲へんてつもないネジかも知れないが、父さんにとってそいつ

は偉大な一歩なんだ」

「なるほど」半沢はひそかに感服していった。

⑥「一寸のネジにも五分の魂だ」

父は悪戯っぽい笑みを浮かべてみせたが、ふいに真剣な顔になる。そして、

「ロボットみたいな銀行員になるなよ、直樹」

といった。

「どういうこと」

「ほら、以前、うちが危なかったときがあっただろう。あのとき、銀行員の顔はみな同じに見えた。助けてくれた金沢相互銀行さん以外はな」

地元の第二地銀である。だまってビールを喉に流し込んだ半沢は、就職活動でついたひとつの嘘を思い出した。産業中央銀行の面接官に対し、「地銀が見捨てた会社を、都市銀行が救った」といったことだ。本当はまるで逆だったのである。

「それに引き換え、産業中央の冷たかったこと。さっさと融資を引き揚げやがった。あれ、なんていったかな。あのクソ銀行員」

「木村よ。木村なんとか」

クソ銀行員だけで、母には通じる。半沢にもだ。

「おう、それだ。お前が産業中央銀行に行くことについては、気にくわいなまでも許してやる。だが、あの野郎だけは許さない。いつか痛い目に遭わせてやれ。敵討ちはお前にまかせる」

お父さんったら、と苦笑した母にたしなめられながらも、新しいネジを開発したばかりの父は豪快に笑った。楽しそうだが、決して目は笑っていない。何年経とうと、どこにしようも、絶対に許さないぞ、そんな決意を秘めた目だ。その目を見たらまた、債権者たちに土下座して手形のジャンプを頼む父の後ろ姿を思い出した。怒りが、半沢の胸にも湧き上がり、アルコールと共に回り始める。

「まかせなよ、オヤジ。オレがいつかとっちめてやるからさ」

本気で半沢はいった。

「なにいつてんの、あちらさんのほうが十も上なんですよ。目上の人に楯突いたら出世できなくなっちゃうじゃない」

そんな母の言葉など気にしなかった。やるもといったらやる。数ある銀行の中でなぜ産業中央銀行を選んだのか。⑦ 決して面接では

口にしなかった動機がそこにあった。

入行した半沢がその後、その、木村なんとかについて調べるのは簡単だった。

木村直高。それが、当時金沢支店で半沢の父が経営する会社を担当していた男の名前だった。散々父に世話になっておきながら、業績に不安を感じると、手のひらを返したように裏切ったクソ銀行員だ。

半沢が入行したとき、木村は、本店融資部の調査役になっていた。「人事報知」が届くたび、友人や知り合いの異動を目で追う傍ら、木村の動向にも目を光らせていた。産業中央銀行の行員数、一万七千人。望んだ接点はなかなかなかった。木村が秋葉原東口支店の支店長になって、よりによって近藤【半沢の同期で、大坂事務所のシニア部分室調査役】の上司になったのが最大のニアミスで、それは結果的に半沢の怒りに油をそそぐことになった。それからさらに五年近く待った。そしてついに木村は、業務統括部部長代理という肩書きで、半沢の前に現れたのだった。

「何歳上だろうが、あの野郎が出世するようなら産業中央も終わりだな。いいか、銀行員である前に人であれ、だ。これは大切なことだぞ」

「誰の言葉、それ」

「オレの言葉に決まってるじゃないか。それとな、どうせ銀行に行くなら偉くなれよ、直樹。偉くならなきゃ、あれほどつまらん組織もないだろう。偉くなって、うちみたいな会社、いっぱい助けてくれ。頼むぞ」

D。オレ、頭取になるからさ」

父はまた豪快ごうかいに笑った。今度は心底、楽しみにしているという笑いだ。

「E」。じゃあ、そのネジ、お前にやるよ。記念すべき夢の実現第一号だ。お守りになるかどうかはわからないが、とにかくやるよ」

父はアルコールに弱いくせに酒好きという、憎めない人種である。こういうときには黙だまって従ったほうがいいと知っている半沢は、ネジをジーンズのポケットにしまい込んだ。

「F」。もらっとくよ」
そのとき――。

「夢を見続けるってのは難しいもんだ」

しみじみと言った父の言葉は、いまま半沢の心に残っている。「それに比べて夢を諦あきらめることのなんと簡単なことか」

「G」。覚えとくよ」

半沢はビールを一気に喉のどに流し込んだ。

「どういうことだ、半沢」

受話器から流れてきた渡真利とまり「半沢の同期で、融資部」【企画グループ調査役】の声には、明らかに戸惑とまどいが滲にじんでいた。

「どういうことって、なにが」

東京にある東京中央銀行「作品の中では、日本のメガバンクの一つで、東京第二」本店営業部の二階。営業第二部次長の椅子いすにゆつたりとかけた半沢は、同期入行の男の狼狽ろうはいぶりを楽しんだ。

「なんでお前がそこにいるってきいてるんだ」

「さあな。どうも浅野あさの「東京中央銀行」【大阪支店長】の野郎が改心して、推挙してくれたらしいな」

「なにをやらかした」

ハナからそんな話を信じるはずのない渡真利はきいた。「オレの出張中にお前に辞令が出たらしいと聞いたから、てっきり出向だと思つたらこれだ。わけがわからん」

「まあいいじゃないか」

辞令は昨日、出た。

本店営業第二部次長。それが半沢の新しい肩書きだった。疑いようなない栄転である。その一報を聞いて一番喜んだのが、妻の花だったのは間違いない。

この一カ月ほどの間、浅野の動きは見ていて滑稽なほどだった。

いままで散々こきおろしてきた部下を持ち上げる。最初は洪る声もあったが、西大阪スチールの焦げ付きを見事に回収してからというものの、人事交渉の障害は消えた。

半沢の栄転が決まったときの浅野は実に複雑な顔をしていた。安堵、苛立ち、羨望——。相反する様々な感情がミックスされ、浅野自身、どう表現していいかわからないように見えた。

「頼む、私の通帳をもう返してくれないか」

浅野には何度か懇願されたが、そのたびに「なんのこともわかりませんね」と応ずることなく東京に戻ってきた。

傑作だったのは、昨日、業務統括部に、クソ銀行員〆の木村を訪ねたときだった。関係部署の挨拶回りのついでに顔を出したのだ。席にいた木村は、半沢の姿を目にした途端、明らかに狼狽し、席を立とうとしたが、「木村部長代理」という半沢の呼び止めにつきりとして動きが止まった。

臨店レポートで、散々に半沢をこきおろし、西大阪スチールの損失が融資課長の実力不足だと断定していた木村だったが、その後、浅野がそれを全面的に否定するという異例の事態になって状況が変わった。

半沢から条件を突きつけられた浅野が選択したのは、唯一刑事告発を逃れることであった。そのために西大阪スチールに対する五億円の融資が自らの独断であり、意図的に半沢の関与を避けたことを認めたのだ。その過程で、本部人脈を漁って半沢を陥れるために様々な圧力をかけたことも認めた浅野は、間もなく大阪西支店長職を解かれ、本部での出向待ちポストへ転出すると見られている。その浅野に加担したことが判明した木村に対してもその後しかるべき内部調査が行われるはずで、いま木村は銀行員生活最大のピンチを迎えているに違いなかった。

「き、君か……」

木村は、落ち着きなく視線を左右に動かし、うろたえていた。半沢と一緒に回っていた営業第二部の副部長が、新しい部下と古参の次長との間のただならぬ雰囲気にはかんとしていた。

「私に何か言うことがあるんじゃないんですか」

返事はなかった。

業務統括部の雑然とした部屋で、木村は学校の先生に叱られた生徒のようにうつむき、唇を噛む。

「約束を果たしてもらいましょうか。いま」

頬が震えだし、訴えるような眼差しがこちらに向いたが、それに対して半沢が返したのは冷やかな目線である。

「あんたが書いたレポートで、こっちは多大な迷惑を被ったんだ。約束は守ってもらいますよ。土下座して謝るんでしたね」

⑧ 事情を察したらしい副部長が「許してやったらどうだ、半沢」と揶揄する口調でいった。この副部長とは、以前一緒に仕事をしていたことがある。半沢の実力も性格も知り抜いている親しい間柄だ。

「そうはいきません。このまま曖昧にしては、私のプライドが許さない。行内で処分されれば済むという問題ではないので。これは木村部長代理と私の問題です」

「い、いや、済まなかった、半沢次長。申し訳ない」

木村は詫びた。だが、「土下座は？」という半沢の声に体が凍り付く。

騒ぎを聞きつけ、辺りにいた行員たちが仕事の手をとめて半沢と木村のやりとりを遠巻きにしている。

うつむいている木村の頬がぴくりと動き、ぐっと奥歯が噛みしめられるのがわかった。この男なりのプライドにみしみしと鱗が入り、歪み、崩落する音が聞こえるようだった。

木村の表情が歪んだ。やおら **H** を折り、靴を履いたまま銀行の床に正座する。

「申し訳ない。この通りだ」

I を床にこすりつけた。許しを請う木村の声がくぐもって半沢の足元辺りに吹きこぼれてくる。刹那周囲が凍り付き、物音が消えた。

「おい。行こっか」

副部長に **J** をぼんと叩かれるまで半沢は、屈服させた敵のはげ上がった頭頂部を冷ややかに見下ろしていた。そして、全員がぼかんと **K** を開けたまま見守る中、揚々とそのフロアを後にしたのである。

銀行というところは、人事が全てだ。

ある場所でどれだけ評価されたか、その評価を測る物差しは人事である。

だが、その人事は常に公平とは限らない。出世をする者が必ずしも仕事のできる人間ではないことは周知の事実であり、それは東京中央銀行でも例外ではない。

正直なところ、半沢は、銀行という組織にほとほと嫌気がさしていた。古色蒼然とした官僚体質。見かけをとりつくりうばかりで、根本的な改革はまったくといっていいほど進まぬ事なかれ主義。蔓延する保守的な体質に、箸の上げ下げにまでこだわる幼稚園さながらの管理体制。なんら特色ある経営方針を打ち出せぬ無能な役員たち。貸し渋りだなんだといわれつつも、世の中に納得できる説

明ひとつしよとしない傲慢な体質——。

もうどうしようもないな、と思う。

だから、オレが変えてやる——そう半沢は思った。

営業第二部の次長職は、そのための発射台として申し分ない。手段はどうあれ、出世しなければこれほどつまらない組織もない。それが銀行だ。

かつて、産業中央銀行の入社試験を受けたときの半沢は、夢を描いていた。この素晴らしい組織を自分の手で動かしてみたい、という途方もない夢だ。

あれから、十数年。バブルの狂乱が過ぎ去り、銀行を美化していた様々なメッキは一枚、また一枚と剥がれていった。そして、いまの銀行は無惨な鉛の城となった。

銀行が特別な存在だったのは、もはや過去の話に過ぎない。いまや銀行は世の中に存在する様々な業態のひとつである。見る影もなく凋落した銀行という組織に、かつての栄光を重ねることは無意味だが、^⑨まったく逆の意味でこの組織を自らの手で動かし、変えてみたいという半沢の思いはかえって募った。

「よく回収したな。五億円」

電話の向こうで渡真利が感嘆の口振りという。「たいしたもんだ。それに、^{ずうずう}凶々しさにも恐れ入るぜ。どうせまた新しい職場でもいいたいことをいうつもりだろう。この銀行で、上司をコケにして出世しているのはお前ぐらいのものだけ」
半沢は笑った。渡真利は続ける。

「ところで、近藤の奴もこっちに戻ってきたことだし、また一杯やらないか」

「いいな」

手帳を広げ、スケジュールを覗き込む。

「それにしても、バブル入組ってのは、つくづく因果な年代だなあ」

渡真利のため息まじりの言葉が受話器から漏れた。「入行して半ば強制的に入らされた持株会では大損。いまだ損失の穴埋めはできない。オレたちの上の世代までは株を売って家を建てるのが普通だったのにな！ それどころか、不況のどん底で期待していた給料はもらえず、ポストも減らされリストラの嵐ときた。まったくいいとこなしだ」

「そう嘆くな、渡真利」

半沢はいった。「そのうちオレが、その負け分を取り戻してやる」

「ほざけ。いつまでも夢を見てろよ」

渡真利は皮肉っぽくいう。「夢と思っていたものが、いつのまにか惨めな現実にすり替わる。そういう気持ち、お前にはわからないだろう」

「そんなことはないぞ」

半沢は否定した。「 L

M ことができる。そういうことなんじゃないのか」

啞然としたような間があったが、それについての渡真利のコメントはなかった。やがて、電話の向こうから空いている日にちを讀み上げる声がして、半沢は、飲み会の予定で埋まったスケジュールの空きを探し始めた。

【問1】

—— a e のカタカナを漢字に改めなさい (楷書で、ていねいに書くこと)。

- ① シタク ② フセグ ③ ムゾウサ ④ モンドウ ⑤ ドウギ

【問2】——①「何の変哲へんてつもない」、②「右から左へ抜けるぬ」とありますが、どういふことですか。次の中から適当なものを選び、

それぞれ (ア) (カ) の記号で答えなさい。

(ア) 人目を引き付ける

(イ) 誤解の余地がない

(ウ) 何も頭に残らない

(エ) 見たこともない

(オ) どこにでもある

(カ) 使い勝手のよい

【問3】

A

B

C

に当てはまる語の組み合わせとして適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) A || よほど

B || まるで

C || ふいに

(イ) A || いささか

B || ちょうど

C || あわや

(ウ) A || さぞかし

B || すでに

C || ふいに

(エ) A || きつと

B || あたかも

C || あわや

【問4】

③「オレは、そんなケチなことと思ってないね」とありますが、この時の父親の思いや考えはどのようなものであつたと考えられますか。次の説明文の(1)～(4)より適当なものを選び、それぞれ(ア)～(シ)の記号で答えなさい。また、**☆**に当てはまる語として最も適当なものを後の選択肢より選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

直樹が三共電機に入れば、それは (1)

(ア) 中小企業の実情や課題を直樹が深く理解すること
(イ) 直樹の科学技術者としての能力を向上させること
(ウ) 三共電機と半沢樹脂工業との関係を強化すること

につながる

だろう。しかし、「オレは、そんなケチなことと思ってないね」と父親は言う。この言葉は、**☆**で三共電機に行つてほしいと考えたわけじゃない、という意味であるだろう。では、父親は直樹の将来について、どう思っているのか。

(2)

(エ) 直樹に自分の会社を継いでもらおうとは思わない
(オ) ゆくゆくは直樹に自分の会社を継いでもらいたい
(カ) 直樹には自分で好きなように将来を決めさせたい

——という考えを、父親は持っていたし、その思いは今も父親の心の中にあるはずである。

しかし、中小企業に関して言えば、(3)

(キ) もはや八方ふさがりだが、優れた製品を開発すれば活路を開くこともできる
(ク) 今は好況であるように見えても、将来の見通しは決して明るいも
(ケ) すでに抜き差しならない状況だが、自分の会社はどうか生き残

、と父親は考えている。これからのモノ作りは、苦しくなっていくだろう。(4)

(コ) だから、直
(サ) それでも、
(シ) しかし、直

れるだろう

樹に自分の会社を継がせようとは思わない
直樹には半沢樹脂工業を継いでもらいたい
樹なら会社を建て直してくれるに違いない

——という、これもまた、父親の本音なのである。

【選択肢】

- (ア) 空理空論 (イ) 舌先三寸 (ウ) 半信半疑 (エ) 損得勘定

【問5】

——④「少し淋さびしそうな父の表情」とありますが、この時の父親は何を淋しく感じていたのだと考えられますか。次の中から適当でないものを1つ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 今後は中小下請け企業にとつて厳しい時代になっていくこと。
(イ) 自分が守り通してきた会社を息子たちには継がせられないこと。
(ウ) これからの取り引きは利害関係だけで動いていくようになること。
(エ) この先の日本においては銀行が潰れるような事態も起こり得ること。

【問6】

——⑤「半沢は心にもないことを口にしてみる」とありますが、どういふことですか。次の説明文の a 〱 d に当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ (ア) 〱 (ク) の記号で答えなさい。

半沢が産業中央銀行から内定をもらったのは、日本が後に「バブル景気」と呼ばれる好景気に沸き立っていた時代である。有名な大学を卒業し、名の通った企業に就職すれば、安定した生活を送ることができるし、定年後も退職金と年金で安心して暮らすことができる。—— a 〱 のである。

戦後、日本の政府は、バブルが崩壊した一九九〇年代まで、銀行などの金融機関に対して手厚い保護を与えてきた。銀行が潰れると、国民の生活に大きな被害・影響を及ぼすことになるから、 b 〱、と考えられたのである。だから、銀行が破綻するなどという事態は、 c 〱。そして、半沢も、そう考えていた日本人の一人だったのである。

しかし、産業中央銀行の入社試験を受けた時から十数年を経た「今」、もはや d 〱。業績が悪化すれば、破綻することだってあり得るのだということを、半沢はよく知っている。半沢直樹の物語から離れて、私たちが生きている現実の世界に目を向ければ、バブルの崩壊後、銀行が大幅な赤字となり、破綻するという事態は現実のものとなっていたのである。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| (ア) 日本人には考えられないことだった | (オ) 多くの日本人が、そう信じていた |
| (イ) 半沢は、それが現実だと知っていた | (カ) 半沢だけは、そう考えてはいない |
| (ウ) 半沢の父親には想像もできなかった | (キ) 銀行だけに頼りすぎてはいけない |
| (エ) 銀行は特別な組織体ではなくなった | (ク) 銀行は絶対につぶしてはいけない |

【問7】

⑥ 「二寸のネジにも五分の魂だ」とありますが、この言葉を発した時の父親の心情はどのようなものであったと考えられますか。次の中から適当なものを2つ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 息子が「へえ」とか「なるほど」としか言わないのを、何だか物足りなく思う気持ち。
- (イ) 自分が作ったネジはちつぽけなものだが、それは努力と工夫の結晶であると思う気持ち。
- (ウ) ネジを開発するために費やした五年という年月を、あつという間だったと思う気持ち。
- (エ) 機械のような人間を否定する自分が、機械の部品を作っているのをおかしく思う気持ち。
- (オ) 心血を注いで開発したネジは、会社の将来を切り開くものになるはずだと思ふ気持ち。

【問8】

⑦ 「決して面接では口にしなかつた動機」とありますが、どういうことですか。次の説明文の a ～ d に当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ (ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。

—— ⑦ 「決して面接では口にしなかつた動機」とありますが、どういうことですか。次の説明文の a ～ d

半沢樹脂工業の a した時、 b するために必要な資金の貸し出しを、産業中央銀行は拒絶した。その時、産業中央銀行の担当者だった木村直高という銀行員は、半沢の父親や半沢樹脂工業という会社を無慈悲に切り捨てたのである。

世話になった半沢の父親に対して、 c ような仕打ちをした木村。——半沢は産業中央銀行の面接を受けた時点でも、木村という行員に強い憎悪の念を抱いていた。半沢が「面接では口にしなかつた動機」とは、木村に d ためにも産業中央銀行に入りたい、という私憤だったのである。

- (ア) 事業を清算
- (イ) 業績が悪化
- (ウ) 雪辱を果たす
- (エ) 因果を含める
- (オ) 事業を継続
- (カ) 株価が上昇
- (キ) 一石を投じる
- (ク) 恩を仇で返す

【問9】

D · E · F · G

に当てはまる登場人物の発言を次の中から選び、それぞれ(ア)～(オ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないこととします。

(ア) なるほどね

(イ) むりするなよ

(ウ) まかせとけって

(エ) そいつはいい

(オ) ありがとう

【問10】

——⑧「事情を察したらしい副部長が『許してやったらどうだ、半沢』と揶揄する口調でいった」とありますが、この時の副部長の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 半沢と木村とが一触即発の状態にあるから、おどけた物言いをするので場をなごませたい。

(イ) 土下座しろという半沢の要求は行き過ぎであるから、何とか半沢をたしなめなければならぬ。

(ウ) 半沢をいさめるようなことを言いながらも、木村という男をかばってやろうという気はない。

(エ) 立場上、自分がこの場を収めるべきなのだが、部下に対してあまり厳しい言い方はしたくない。

【問11】

H · I · J · K

には、身体の一部を表す漢字1文字が入ります。次の中からそれぞれ適当なものを選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

(ア) 頭

(イ) 耳

(ウ) 口

(エ) 首

(オ) 肩

(カ) 膝

【問12】

⑨ 「まったく逆の意味でこの組織を自らの手で動かし、変えてみたい」とありますが、どういうことですか。次の

説明文の

a

〜

c

に当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ

(ア) (イ) (ウ) (エ) (オ) (カ) の記号で答えなさい。

産業中央銀行の入社試験を受けた時の半沢には、銀行という組織を自分の手で動かしてみたいという夢があった。それは、取引先の可能性を正しく見抜き、銀行という組織を使って、将来性を持った企業を a できるような銀行員になりたい、という思いであったに違いない。その頃の銀行は、社会の基盤として人びとの生活を支える存在であり、経済活動に対して大きな影響力を持っていたのである。

半沢が銀行に入ってから十数年が経ち、今や銀行は世の中に存在する様々な企業の一つに過ぎないものとなった。しかし、半沢は今、「逆の意味で」銀行という組織を自分の手で動かしたいという夢を持っている。それは、銀行という組織を内部から b し、その保守的で官僚的な体質から c させることである。今や、政府による保護がなくなった銀行という組織を守るとともに、社会の中での存在意義を持った銀行を創り上げていくこと。それが、今、半沢の夢見ていることではないだろうか。

(ア) 排除 はいじょ

(イ) 支援 しえん

(ウ) 迫害 はくがい

(エ) 改革 かいかく

(オ) 脱却 だつきやく

(カ) 崩壊 ほうかい

【問13】

L

・

M

に共通して当てはまる語句を、本文中から6文字で抜き出して答えなさい。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「人とのコミュニケーションは大切だ」とか、「社会ではコミュニケーション能力が問われる」とか、よく耳にする。その言い方からは、自分の考えをことばにして相手に伝えることや場の空気を読むことだけが「コミュニケーション」だと思いかもしれない。でも、それだけではない。人とモノをやりとりすることも、^①重要なコミュニケーションの一部だ。

私たちは、つねにいろんなモノを人とやりとりしている。家庭の食卓で親のつくった料理を食べることも、子が親からお小遣いをもらうことも、働いて給料を手にすることも、そのお金を払って店でモノを買ったり、それを人にプレゼントすることも、すべて私たちが日常的にくり返しているモノのやりとりとしてのコミュニケーションだ。

でも、そのいろんなモノのやりとりのなかで、ふつうは^②「モノを買うこと」と、「人にプレゼントを渡すこと」は、まったく違う行為だと考えられている。親からお小遣いをもらって、店でモノを買うとき、お金が人から人へと同じように動いているのに、二つのお金のやりとりは、まったく違ってみえる。それは、なぜなのだろうか。

経済を研究してきた人類学は、こうした問いに向きあってきた。人からプレゼントをもらい、それへのお返しを渡すという贈与交換。経済とは無関係に思えるこの行為も、人と人とのモノを介したコミュニケーションとみなせば、店でお金を払って商品を買う行為と比較可能になる。この広い視野こそが、文化人類学ならではの思考法だ。

「贈与」を人類学の重要な研究テーマにしたのが、マルセル・モースだ。モースは、『贈与論』（原著初版一九二五年）のなかで、なぜ多くの未開社会にとって贈与がきわめて重要な意味をもつのか、その贈与がいかに法や経済、宗教や美など社会生活の全体と深く関係しているのかを考えた。贈与には、社会のあらゆることが混ざりあっている。モースは、そのことを「全体的社会的事実」と表現した。

③ モースが注目してとりあげた事例のひとつが、マリノフスキーがニューギニアの調査から報告した「クラ」という贈与交換の制度だ。トロブリアンダ諸島とその近くの島々の首長は、カヌーの遠征隊を組織し、海を越えて贈り物を送り届け、食事や祝祭による歓待を受ける。それはときに命がけの危険な航海になる。このクラで贈り物として渡される宝物（ヴァイグア）には、二種類しかない。赤色の貝の円盤状の首飾り（ソウラヴァ）と白い貝を磨き上げた腕輪（ムワリ）の二つ。

首飾りは島々のあいだを時計回りに、腕輪は反時計回りに動くように、厳格な作法に則って贈られていく。他の島のパートナーからもらった贈り物は、しばらく手元に置いたあと、決められた方向の別の島のパートナーへと贈られる。保有しつづけることは許されない。首飾りや腕輪は、所有物でも、何かのために使われる消費財でもない。ひたすら贈り物として循環しつづける。宝物には名前がつけられ、それを手にした人物の伝説が語り継がれ、神話とも関連づけられている。呪術的な力もある（病人の腹にこすりつけたりする）。この贈答品の交換が、人びとの価値観や社会的名誉、島々のあいだの秩序を支える土台でもある。

④ こういう話を聞くと、まったく異質な世界の理解不可能な話に思えるかもしれない。でも、じつは、私たちも同じようなことをしている。たとえば、サッカーW杯の優勝トロフィーがそうだ。あのトロフィーには歴代の名選手が手にし、数々の歴史に残る試合の記憶が刻まれている。ただの代替可能なモノではない。プレーする選手も、応援する観戦者も、多くの犠牲を払ってでも、このなにかに使えるわけではない（事実上、売ることもできない）トロフィーの争奪戦に熱狂する。手にしたトロフィーは、四年後には手放され、またあらたな一時的保有者を決める戦いが世界中で繰りひろげられる。もしサッカーを知らない異星人がみたら、トロフィーをめぐって玉を蹴って網に入れる壮大な儀礼を、クラと同じように好奇心をもって報告したかもしれない。私たちは、モノを介して不思議なコミュニケーションをしている。そこには、いったいどんな意味があるのだろうか。

⑤ モースは、クラの分析で重要な指摘をしている。それは、人びとがクラ交換だけをしているわけではない、という点だ。複数のモノのやりとりの形式が同時に併存している。

クラによる贈与交換が行われるとき、実用的な物品を経済的に交換する「ギムワリ」も行われる。そこでは執拗な値切りあいがない

される。それはクラでは許されない。相手に贈り物を強要するなど、クラでギムワリのようなふるまいをすると非難の対象になる。ほかに、クラのパートナーでもある漁村と農村のあいだで農産物と漁獲物とを分け与えあう「ワシ」という関係もある。首長に奉仕した集団に食べものを分配する「サガリ」という儀式もある。

人びとは複数のモノのやりとりの方法を明確に区別しており、そこに違う意味を見いだしている。それは私たちも同じだ。プレゼントを贈ることと、商品を買うこと。家族で食卓を囲むことと、レストランでお金を払って食事すること。つねに人のあいだでモノがやりとりされているが、私たちはそれを別のものとして区別している。親しい間柄の親密な贈り物の交換は、商品の交換とは正反對の行為だとすら考えている。

なにが贈与交換と商品交換とを区別しているのか。文化人類学では、それらを次のように区別してきた。贈与交換は人と人となげ、商品交換は関係を切り離す。「贈り物」は贈り主のことを想起させる（＝人格化）。一方、「商品」は作り手や売り手を無関係なものとして切り離す（＝非人格化／匿名化）。あるいは、^⑥社会秩序の再生産をめざす長期的な交換サイクルにかかわるか、利潤を追求する個人の短期的交換サイクルにかかわるかの違い、との指摘もある。

家族は長期的に維持されると考えられているので、親が料理のたびに子どもにお金を払わせたりしない。親は子の世話をし、いずれは子が親孝行するといったように、関係の持続が期待されている。その子が結婚して親になると、また自分の子どもに……と続く。人格化された社会の長期的秩序の再生産とは、そういうことだ。ここでは贈与の関係がふさわしい。一方、商品ならば、できるだけ安く買いたいし、できるだけ高く売りたい。それがどんな相手かは関係ない。有利な取引ができなければ、次も同じ人と売買するとは限らない。それが人間関係とは切り離された非人格的な短期的取引の意味だ。

ただし売買であっても、お得意様がいたり、行きつけの店ができたこともある。同じ商品でも、値段ではなく、お気に入りのお店や知人だからという理由で買う人もいる。商売のうえでも、リピーターやファンを増やすといった長期的な関係が大切なのは明らかだ。商品交換が短期的で非人格的な取引だけに終始するわけではない。

商品交換と贈与交換は分離ぶんりされた営みではなく、連続線上にある。そのやりとりの連鎖れんさのなかで、モノは意味や価値を変化させる。どこでも売られている商品でも、親族の遺品だと、故人を偲しのばせる大切な形見になる。有名人の持ち物は、ありふれたモノであっても高額オークションの対象となる。モノは、いろんな履歴りれきをたどる。このモノの意味／価値の変遷へんせんに注目したのが、イゴール・コピトフだ。彼は、モノが「交換不可能なかけがえないもの」と「いつでも交換できる商品」という二つの極のあいだを動く、と指摘した。つまり、贈り物と商品との境界は固定していない。

⑦ 贈り物と商品が切り離されていないからこそ、私たちはいろんなモノのやりとりをとおして、その意味や相手との関係を変化させることができる。商店でも、特別におまけをつけたり、サービスで割引したりする。商品交換の場でも、贈り物を渡すかのようなふるまいをすることで、親密で長期的な関係づくりがめざされるのだ。

私たちが親密だと思っている人間関係は、特定のモノのやりとりをするからこそ、長期的な人格的關係として維持されている。家族は何もしなくてもつながっているのではなく、食卓いっしょと一緒に囲むといった行為をとおして家族になる。別のモノのやりとり、たとえば食事のたびにお金を払わせたりすれば、その関係は別のものに変質するだろう。⑧ 世界の現実かは、こうして私たちのモノを介し

たコミュニケーションがつくりだしている。

【問1】

——①「重要なコミュニケーションの一部」とありますが、これに当たるものとして適当なものを次の中から2つ選び、

(ア) (オ) の記号で答えなさい。

(ア) 友だちに消しゴムを貸す。

(イ) SNSで書き込みをする。

(ウ) クラスの話し合いで発言する。

(エ) 図書館で本を借りる。

(オ) 礼状の文面を考える。

【問2】

——②『モノを買うこと』と、『人にプレゼントを渡すこと』とありますが、①「モノを買うこと」と、②「人にプレゼントを渡すこと」とは、本文でどのような言葉でまとめられていますか。それぞれ漢字4字で抜き出して答えなさい。

【問3】

——③「モースが注目してとりあげた事例」とありますが、このことについて、タカシとアヤネが相談しています。次の文章を読み、 に当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ) の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

タカシ ニューギニアって、どの辺にあるのかな？

アヤネ オーストラリアの北側ね。ニューギニア島は、メラネシアのひとつで、いまは、インドネシアの島々とパプア

ニューギニアの二カ国の領土になっているわ。その中でもトロブリアンド諸島っていうと、ニューギニア島からさらに東にある、珊瑚礁でできた島々のことを指すみたい。

タカシ その島々のリーダーたちがカヌーに乗って、定められた宝物を贈り合っているのか。

アヤネ 宝物は、本文によれば **a** の貝でできた首飾りと白い貝でできた腕輪ね。前者は時計回りに、後者は逆方向に移動していくんですって。

タカシ 宝物っていうけど、それ自体が大切なものというわけではないみたいだね。

アヤネ そう。 **b** することは許されないし、 **c** しつづけることもできない。それよりも、交換を繰り返して

て **d** することに重きが置かれているのよ。

タカシ ただの貝殻だったものが **e** を持つことによってかけがえのないものになって、手にした人物の **f** や **g** とも結びつけられていくのか。

アヤネ そもそも宝物だから贈られるのではなくて、贈られることによって宝物になっていくのね。

タカシ そうか。だからこの交換の制度が、宝物の **h** を共有しているひと同士の結びつきを強めて、 **i** の維持に貢献しているんだ。

(ア) 神話 (イ) 秩序 (ウ) 伝説 (エ) 保有 (オ) 循環

(カ) 名前 (キ) 消費 (ク) 赤色 (ケ) 価値

【問4】

——④「じつは、私たちも同じようなことをしている」とありますが、筆者は「クラ」の制度とサッカーW杯がどのような点において同じだと述べていますか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) クラの制度では、できるだけ長い時間をかけ使い続けられてきた贈答品ちやうとうひんにこそ価値が置かれる。これと同様に、サッカーW杯では、代々大切に保管され、歴史的に受け継がれてきた期間の長い優勝トロフィーが四年ごとの受け渡しわたにおいて貴重だとされる点。

(イ) クラの制度では、贈られたものが必ずそのまま他に渡され、それを手にした人物の物語も受け継がれていく。これと同様に、サッカーW杯では、優勝トロフィーが四年後には手放され、手にした歴代の名選手や歴史に残る試合の記憶がそこに刻まれていく点。

(ウ) クラの制度では、組織された遠征隊えんせいたいの威風いふうや陣容じんちゆうの印象が末代まで語り継がれていく。これと同様に、サッカーW杯では、チームとしてもっとも優れた集団こそ優勝トロフィーを手にすることができ、その試合を見守った観客によって伝説になっていく点。

(エ) クラの制度では、相互そうごに面識のない者同士が、贈り物によって新たな結びつきを得る。これと同様に、サッカーW杯では、敵と味方に分かれた者同士であっても、試合後のトロフィーの受け渡しによって、同じ人間として国や地域を越えて理解しあえる点。

【問5】

——⑤「不思議なコミュニケーション」とありますが、このことに関する次の説明文の a ～ e に当てはまるものを後の選択肢せんたくしより選び、それぞれ (ア)～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

私たちの身のまわりにおいてモノのやりとりが行われる際、aとbを交換するか、だけでなく、それをc、dで、どのように、いくらで交換するのかが問われます。ありふれたものであっても、そもそもe交換するのかに無自覚であっても、このやりとりによって人びとが有機的に結びついていく点を、本文では「不思議」だと述べているのです。

- (ア) かれ (イ) なぜ (ウ) なに (エ) どこ (オ) だれ (カ) いつ

【問6】——⑥「社会秩序ちつじよの再生産をめざす長期的な交換サイクル」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当

なものを選び、記号で答えなさい。

- (ア) 実用的なモノのやりとりばかりではなく、相手の名誉めいよを第一に考え豪華な品物を贈ることによって、その地位を保つていこうとする仕組み。
- (イ) 定期的なモノのやりとりばかりではなく、その時々ときときに必要な品物を贈り合うことを通じて、お互いたがの生活を便利にしていこうとする仕組み。
- (ウ) 即物的なモノそくぶつてきのやりとりばかりではなく、相手の置かれている状況じょうきょうを把握はあくすることを通じて、規律のある関係を築いていこうとする仕組み。
- (エ) 一時的なモノのやりとりばかりではなく、末永く相手との関わりを保つために、時間をかけてお互いの親密さを増していこうとする仕組み。

【問7】

⑦ 「贈り物と商品が切り離されていない」とありますが、このことについて、タカシとアヤネが相談しています。

次の文章の、**a** ～ **f** には「贈り物」「商品」のいずれかが入ります。その組み合わせとして適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

タカシ 「贈り物」と「商品」が切り離されていないって、どういうことだろう？

アヤネ **a** であつても **b** みたいに扱われることがあるんじゃない？ たとえば、この間の、タカシくんの

誕生日ケーキはどこで買ったの？

タカシ 僕の誕生日のときは、かならず決まったお店で買うよ。親戚の叔父さんが洋菓子店を営んでいるんだ。あ、そういうえば叔父さん、僕が甥っ子だからって、いつも特製の名前入りのプレートサービスをしてくれるな。

アヤネ それって、**c** であることが、**d** に含まれているんじゃない？

タカシ たしかに、親戚だからってケーキ自体にお金を払わないわけではないし、プレートのサービスは本来、有料なんだ。そういうえば叔父さん、元々は会社員だったのに、途中で辞めていまのお店を開いたんだよな。

アヤネ きつと、商売とはいえ、それを通して実現したいことがあるんだと思うわ。おいしいケーキを提供することでお客さんに笑顔になつてほしいとか。

タカシ あ、そうか。誕生日用のケーキも、売ればそれでいいわけではなくて、お客さんの喜ぶ顔が励みになることだつてあるよね。

アヤネ **e** だつて、作つたり売つたりしているひとの気持ちが込められているとなれば **f** ということになるのよ。

タカシ だから「贈り物」と「商品」って切り離せないんだね。

(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
a	a	a	a
贈り物	商品	贈り物	商品
b	b	b	b
商品	贈り物	商品	贈り物
c	c	c	c
商品	商品	贈り物	贈り物
d	d	d	d
贈り物	贈り物	商品	商品
e	e	e	e
贈り物	贈り物	商品	商品
f	f	f	f
商品	商品	贈り物	贈り物

【問8】

——⑧「世界の現実とは、こうして私たちのモノを介したコミュニケーションがつくりだしている」とありますが、このことに関する次の説明文の a ～ f に当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ (ア) ～ (カ) の記号で答えなさい。

ことばを介して相手と意思の疎通をはかることだけがコミュニケーションではなく、人とモノをやりとりすることもコミュニケーションであるならば、私たちが日常と呼んでいる世界のほぼすべては、コミュニケーションで埋めつくされていることになります。

そうすると、かつてマルセル・モースが、特定の社会における人びとのモノのやりとり注目し、その事態を「全社会的事実」と呼んだのもうなずけるのではないのでしょうか。贈与の形をとったコミュニケーションは、法や a、b や美などと深く関わっており、世界の現実を規定しているのです。

ところが、贈与というふるまいが社会を規定するものであるならば、贈与とは、見かけや思いこみに反して、任意的で c 的なものではなく、義務的で d 的な側面をもつことになります。なぜなら贈り物は、個人のおく意思とは別に、気前よく与えられねばならず、喜んで受けとられねばならず、忘れることなくお返しされねばならないからです。つまり贈与には、はじめに贈与する義務、次にそれを e する義務、最後に f する義務という、三つの義務がともなうことになります。贈与をめぐる相互の関係性は、世界の現実を規定しつつ、内部の人たちにとっては、そのようにふるまわなければならない、同調圧力として機能する側面もあると言えるでしょう。

(ア) 宗教

(イ) 自発

(ウ) 受領

(エ) 慣例

(オ) 返礼

(カ) 経済

【問9】 筆者の意見や考えとして適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) コミュニケーションの訳語が「意思疎通」であることからわかるように、コミュニケーションの本質は、言葉を通じて自分の考えを相手に伝えることや、相手の感情や思考を把握することにこそある。

(イ) 「クラ」というモノの交換をする制度において、他の島のパートナーからは贈り物として元の部族が大切にしている宝物が届けられる。受け取った側は儀礼の場でその価値を称揚し、祭り、大切に保管しなければならぬ。

(ウ) サッカーW杯は、優勝トロフィー自体に価値があるわけではないのに、プレーする選手も応援する観戦者も、その争奪戦に熱狂する。トロフィーの一次的保有者を決めるこの戦いは、玉を蹴って網に入れる壮大な儀礼としてのコミュニケーションだと言える。

(エ) 贈与による交換の制度は人と人をつなげ、商品の交換は関係を切り離す。「贈り物」は贈り主のことを想起させる一方、「商品」は作り手や売り手を無関係なものとしてしまうからである。この違いは決定的であり、時代を問わず普遍の真理である。

(オ) 故人の遺品が大切な形見となるように、有名人の持ち物は高額オークションの対象となりえる。商店でも、特別におまけをつけたり、サービスで割引したりする。商品と贈与は、そのやりとりの連鎖のなかで、モノの意味や価値を変化させている。

(カ) 近代に入って、同族・血族であることが家族であることを証明する貴重な事実となった。これは、科学の発展と無縁ではなく、通常の関わり方を越えて、生命としてのつながりが尊重されるようになっていく。

【出典】

I 池井戸潤 『半沢直樹1 オレたちバブル入行組』（講談社文庫、二〇一九年、三七八〜三九四ページ）より。

II 松村圭一郎 『文化人類学の思考法』（世界思想社、二〇一九年、八五〜九〇ページ）より。

